

青少年くらし

家庭版

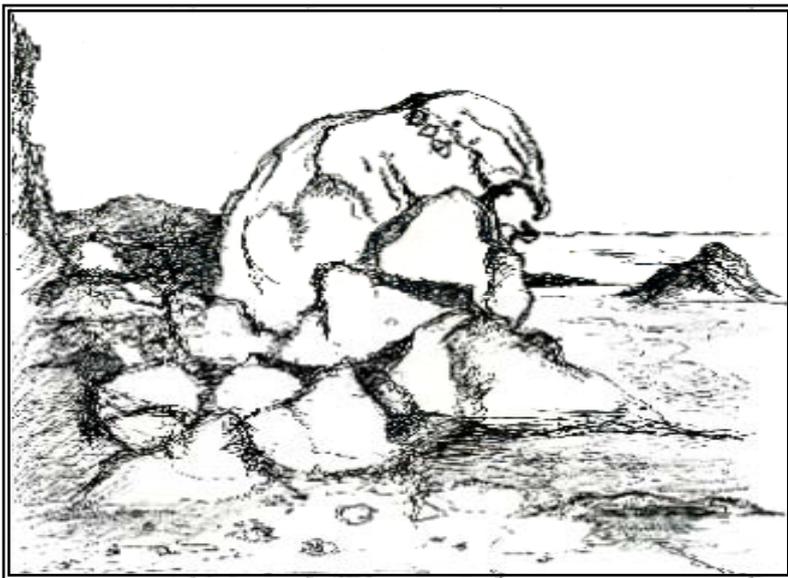
発行
会敷市教育委員会
編集
生徒学習課
☎ 426-3845

5月



タンチョウの

夫婦愛と子育て



象岩 下津井沖の六口島にある奇岩。巨象が水と戯れる姿に似ているところから命名。
絵 藤井 啓三郎先生

「タンチョウの夫婦は、生涯仲良く暮らします。そして、子どもができると大事に大事に育てます。でも、その子が生きていくすべというのには厳しく教えています。」

岡山県自然保護センター主任研究員 井口萬喜男先生の「タンチョウの里」と題したご講演要旨の後編をお届けします。

原因は ストレス

ラックの症状は



私は夢中でかじってラックに食べさせました。

十二時を過ぎたころ突然「カーカッカー、カーカッカー」と、ラックとクロメの鳴き合いが始まりました。いかくの声です。このいかくが始まるや否やラックはぱつと起き上がって、よたよたしながら戸口の方へ逃げていきました。二度三度と「ラック大丈夫だよ。こっちへ来い。」と声をかけると、やっと落ち着いてきて私のそばへ寄り寄ってきました。それから、朝までしっかりと抱きしめてやりました。ラックも私のどこかをいつもかんでいました。それで、朝になると、散歩することができるようになりました。散歩が快復しました。そして、次の日から、ラックと私は、別のケージで生活することにしました。

ラックの病気は、ラックとクロメのいかくの鳴き合いでストレスがたまったことが原因でしたが、これだけでなく、私たち飼育係にもストレスの原因がありました。普通、タンチョウの親は、だいたい八か月ぐらい子どもの面倒をみます。それなのに、私たちはラックが飛べる状態まで成長したというところで、生後三か月で親子の別れをさせました。そのために、ラック

クにストレスがたまっていたたのでした。そんなラックでしたが、一週間後には素晴らしく元気になり、後樂園の上空を飛べるようになりました。そして、その後も力強く成長していきました。

タンチョウの

夫婦愛



約二年後、ラックは

「花嫁がほしい。」と言うようになりまして。そこで、高橋さんをお願いして、北海道でユリと見合いをしたところ、晴れて夫婦になることができました。そこで、私はラックとユリを岡山へ連れて帰るためにすぐ北海道へ行きました。ケージの扉まで行くと、遠くの方で私を見つけたラックが、「カカコォー、カカコォー」と鳴いて、羽を広げて頭を上下にしながら近づいてきました。「父さん、ひさしぶり。」と言っているようでした。そして、ちよつと後ろを向いて、「カラカラカラカラ」と鳴くと、ユリが近づいてきて、夫婦のダンスが始まりました。高橋さんでさえ「こんなに美しいタンチョウの舞を見たのは初めて。」というほどのダンスでした。「ラックが、私を覚えていて素晴らしいダンスをし

ながら奥さんを紹介してくれた。」というところがとてもうれしくて感激しました。二日目も三日目も同じように踊ってくれました。

ところが、四日目にケージの扉を開けようすると、ラックが攻撃の姿勢になりました。「これから、俺とユリの部屋なのだ。父さん入らないでくれ。」という意味のいかくでした。でも、「まさか父さんの私に。」という気持ちがありましたから入ろうとしました。その瞬間でした。足が顔をかすめ、くちばしがせまってきました。もう怖くて扉をすぐ閉めました。それからというものは、私はラックの部屋に入れなくなりました。

そういうふうには、タンチョウの夫婦は、非常に仲が良く助け合っています。生涯、浮気などは一切ありません。だから、夫婦になるには、互いが好きにならないといけません。そのためには、最初に食事が一緒にできることが必要です。それから、「タンチョウの舞」がでないためです。そして、「夫婦の鳴き合い」になります。「これは、雄が一声「カア」と鳴くと、雌が「カツカツ」と鳴きます。この鳴き声は夫婦によって違います。互

いを思いやる気持ちを込めた、いい鳴き合いができた時に初めて夫婦になれるのです。

タンチョウの

子育て



そして、子どもが

できると、子ども一辺倒です。大事に大事に育てます。でも、よく観察していると、その子が生きていくすべというのには厳しく教えています。食べることも、好き嫌いがけっこうありますが、お父さんお母さんはいろいろな工夫をしながら、いつの間にか何でも食べられるようにしつけています。危険を察知して身を守るすべも教えます。カラスがかなり遠くにいても「危ない」と教えます。子どもはその度に隠れ、親は身をいしてその場所を守ります。高梁川にはママシがいますが、それをつかまえてきて子どもにも攻撃させます。見ていると怖いぐらいです。最後は、親が殺して食べてしまうのです。ほかのヘビにはこんなことをしません。ママシは怖いということを教えているのです。

そして、「もつこの子は一人でやっていける。」という時、親子の別れがきます。ケージの中では

なくて、自然界の別れ方というのは、見ていると切ないものがあります。別れの日というのは、お父さんが先頭で、間に子どもが一羽か二羽入ってお母さんという順に飛んでいきます。上昇気流に乗って、ぐんぐんスピードを上げていきます。子どもは、ついていくのがやっとです。そんな時、お父さんが方向転換します。お母さんはお父さんについて飛んでいってしまします。残された子どもは、そこらじゅうを飛んでいます。そのうちにあきらめて降りてきます。でも、その場合も親の愛情があります。給じ場があつて同じ境遇の仲間や一年二年先輩がいる場所が別れます。だから、その仲間からいろんなことを教わって、将来の伴りもそのグループから探します。

そういうふうには、タンチョウは、夫婦の思いやりを基本にして生きていくのです。(おわり)

青少年に関する相談

電話 (086)426-3741
メール young-kokoro@kurashiki-oky.ed.jp



生涯学習課 倉敷市青少年育成センター